

東方學術協會編

中國史學入門（上）

昭和二十二年九月、京都、高桐書院刊
 四六判、三一四頁、價一〇〇圓

非常にさわやかな九月のある朝私は胸をはりながら私の研究室へ入つていつた。朝日がたのしげにさしてゐる外山軍治氏の研究机の上に見るからにスマートな新刊書が二三部置かれて輝くばかりの風情であつた。それはやつと昨日でき上つたばかりと思はれる「中國史學入門」（上）であつた。私はこれができるまでにこまねずみのやうにかけまはつて努力してゐた主編者の外山氏を平日よく見てゐたので、氏がこの本と私に贈つてくれるであらう時の得意氣な顔を想像して思はずば、あんだのであつた。

「中國史學入門」は上下二冊、からなるが、この上に筆をとつてゐる人はみな平日私のおそれかしこむ先輩友人ばかりである。その文章にはいかにも彼ららしい綿密な智識と豊富な技倆が文

字のはし／＼にまでゆきわたり、そのためにまたいかにも彼ちらしい、ゆかしい香氣と品格とが心よき波長をもつた電波のやうに私の神經を打つのである。私はこの本を読み始めるとやがて彼らの肉聲をそのまゝ聞いてゐるやうな感じをうけ思はずつりこまれて一氣に最後まで讀みをはつてしまつた。

ユ・モラスな調子で笑はせながら、どん／＼困難な中國史學の門内へ人をつれこんでしまふのは宮崎市定氏の「總論」である。冷澄なること秋の泉の如くに「先秦時代」の研究史を紹介するのは貝塚茂樹氏である。かゆいところに手がとどくやうにあるひは時代を説き、あるひは文獻を示してその利用法までも教へ訓してゐるのは「秦漢時代」の大島利一氏「魏晉南北朝時代」の宮川尙志氏、又「隋唐時代」を受けもたれた塚本善隆氏「五代宋」を説かれた外山軍治氏である。しかし實をいふところまではほんとにたのしい氣持ちで讀んで來た私であつたが、次の藤枝晃氏の「遼金時代」を讀むにいたつて、一寸暗いものにおそはれざるを得なかつた。そのわけは氏が遼金史の將來について「その研究は必ず衰退するべき運命にある」と豫言してゐるからであつた。

私は靜かに巻をふせて考へにふけつた。「衰へる！」何といふ好ましくないひびきをもつた言葉であることか。だがこれは本當だ！しかもたゞに遼金史研究どころか。我が邦における中國史研究の全體が恐らくは「必ず衰へる」といふ運命にあるやう

に思はれるのだ。

それはなぜなのか？　これまで私たちがこの「入門」の執筆者と共に努力して研究して來た中國史學研究の道の天上には常に輝やかしい日輪「大日本帝國」が存在してゐた。私たちはそれを意識するとせなにかゝはらず、ひとしくその恵みに浴してゐたのだ。だが今やその日輪はない。光の下にこそ始めて育つた我が中國史學はもはやその生長をやめ、枯れしげれてゆく運命にあるとは一應は誰もが認めざる得ないところであらう。

そうだ！　いかにも大日本帝國的中國史學はもはや枯れてゆかねばならぬにちがひない。だが中國史學の有り方はたゞ一つ大日本帝國的でしかあり得ないものなのか？　この見やすい道理にさへ氣がつけば我らの中國史學はけつしてその將來を悲しむを要しないだらう。從來のやうな甘い研究態度や甘い研究者は實は雲のわくやうにゐたとしても、それで眞の中國史學の隆盛といはれまい。「我が邦の中國史學は……」といつて國威を誇つてゐるのか、學問の眞の價值を誇つてゐるのかわからないやうな態度はたしかに清算されねばならぬだらう。だから眞に科學としての中國史學はむしろこれからこそ我が邦に起つて來るべきであらう。そうしてかくあるべきことが「入門」執筆者諸氏の文章のそこにはつきりと讀みとられると私は思ふのである。さしあたつては貝塚氏のやうに冷徹極まる批判的態度、或は又藤枝氏の「治者の史學でよく被治者の史學を」といつた

やうな考へ方に新しい日本の中國史學の道はあるだらう。

「中國史學入門」上は一方から言へば、すでにでき上つたものとしての中國史學への入門として、たしかにこれ以上は望めな
いと思はれる程のできばえである。しかし讀者がもしこの門に
入つたまゝ、その巨大な財寶に眼くらんで、それを少しも整理
することもなく自己のものとして擧取することもなしに、あた
かも迷宮に入りこんだ者の如く再び出て來ることがないとし
たら、恐らく執筆者諸氏はさうした。讀者に失望するであらう却
つて讀者がこの門を、再び歸ることなき故郷の門として、整理
された財寶をどつさり持ち出し、それをしつかり背に負つて新
生の意氣も高く處女地を求めて出發する姿を見る時にこそ、こ
の書の執筆者諸氏は極みなき満足をもつてそれを眺めるであ
らう。

附記、本書にはいくらかミスプリント等見えるやうである
がそれは再刊の時に訂正するはずであると編者からの傳言が
あつたから申しそえておきます。

〔宇都宮清吉〕